



春ばあちゃん

春待ち りこ

春ばあちゃん

「子供の頃、一度だけ雪ん子を見た事がある。
可愛らしい女の子だった。
小雪みたいに可愛らしい子だったねえ。」

目を細めた春ばあちゃんが、懐かしそうに話す。
雪ん子のお話をしている時の春ばあちゃんは、なんだかすごく幸せそうだ。

「春ばあちゃんの子供の頃ってどんなだったの？
会って見たかったなあ。」

「ふふっ。もちろん可愛い子供だったさ。
みせてやりたかったねえ。」

春ばあちゃんが笑っている。
このお茶目な笑顔に、何度助けられただろう。

私は五歳の時、両親を事故で亡くした。
祖母である春ばあちゃんに引き取られて、もう十年。
お母さんの妹の夏子おばちゃんと三人暮らしだ。
この家で、私は大切に育てられてきた。

北風が、ぴゅーと音をたてた。
枯葉がからからと、吹き溜まりまで運ばれていく。
もうじき、雪が降るだろう。厳しい冬が、またやってくる。



「大変だ！ 春さんが倒れたぞ。」

隣の二瓶さんが、慌てた様子で駆け込んでくる。

「小雪は、家で待っていなさい。
詳しい事がわかったら、すぐ電話するから。」

夏子おばちゃんは、そう言って病院へ向かった。
一人で家にいても、落ち着かない。
窓の外には、雪が降っている。

あの日も雪が降っていた。
両親の乗ったバスが雪道でスリップして、崖から転落した日。

お母さんは。。。

私への土産のマグカップを抱きしめたまま亡くなっていたそう。
きっと、割れないように必死に抱え込んだのだろう。

マグカップなんか割れてもかまわないから、
自分の命を守って欲しかった。
今でもそう思う。
両親の突然の死は、私から笑顔を奪った。

そんな私を元気付けてくれたのは、春ばあちゃんだった。
一人ぼっちになった私を引き取り、いろんな話をしてくれた。
お母さんの子供の頃の楽しい思い出話だったり、雪ん子の話だったり。
そして、見るのも嫌だったあのマグカップに、
いつも温かいミルクを注いでくれた。

「これは、お母さんの『小雪を想う気持ち』がつまったカップなんよ。」

春ばあちゃんはそう言いながら、
毎日毎日、マグカップにミルクを注ぎ続けた。
だんだんとお母さんの優しさが、
そのミルクに溶け込んでいるような気がしてきたのは、
ずいぶん時間がたってからの事だ。
そんな風にして、私の笑顔を少しずつ取り戻してくれたのだ。

雪は、降り続けている。

春ばあちゃんの事を思うと、居ても立ってもいられない。
とにかく、病院へ行ってみようと思った。
ここで待っているより、ずっといい。
家から飛び出した私を、ふいに不思議な感覚が襲う。
辺りの景色がいつもと違うのだ。あるべき家が無い。
あるべきコンビニも消えている。振り返ると、
築六十年のボロボロの我が家が、新築みたいになっていた。

とても信じられない……。

その時、玄関がガラッと開いた。
そして、おかっぱ頭の可愛らしい女の子が、
私の家から出てくる。びっくりして固まった。

「誰？ 見かけん子やね。なんかご用？」

女の子はそう言って、私をじっと見つめる。

「変わった着物着とるね。
とっても、素敵な色。ねえ、どこから来たん？」

なんて答えていいのか、困った。だって、私の家はここなのだ。
どこから来たか？

.....私の方が尋ねたい。
それに、もう一つ不思議な事があった。
私は、その女の子に何となく見覚えがあるのだ。
どこかであった気がする。
いったいどこで？
しばらく、沈黙が続く。
雪は、しんしんと降り続いていた。
私の肩にうっすら積もった雪が、
息を吐き出した拍子にはらりと落ちる。
すると、女の子は急に素っ頓狂な声でさげんだ。

「わかった！ 雪ん子ね。あんた、雪ん子でしょ。」

私を雪ん子だと勘違いしたらしい。

「違うわ。」

慌てて否定する。
でも、その答えを待たずに、
女の子は家の中へ駆け込んでいってしまった。

「かあちゃん、大変よ。雪ん子が、遊びに来たよ。」

「春、雪ん子が遊びに来るわけないでしょ。」

家の中から、さとすような声がする。
春って.....春ばあちゃん？
そう思った瞬間、私の意識は薄れていった。

● ● ●

気がつくと、家の近くの路地にぼんやり立っていた。
辺りの景色は、すっかり元に戻っている。

今のは、夢？

家を出たときより、だいぶ雪が深くなっていた。
かなり長い間、ぼんやりしていたらしい。

春ばあちゃんの事が、また心配になってきた。
もしかしたら、もう家に帰っているかもしれない。
慌てて家に向かって駆け出した。

家の前で、私は呆然と立ちすくんだ。
そこには、一枚の紙が張られている。
忌中と書かれたその紙は、
春ばあちゃんの死を意味しているのだろう。
家の中に入るのが、怖くなった。
そこに、春ばあちゃんがいる。
でも、「おかえり」とは、おそらく言ってもらえない。

恐る恐る玄関の中に入ると、
夏子おばちゃんの声が聞こえてくる。
台所で、誰かと話をしているみたいだ。

「……ちゃんと、天国へいけたかしらね。」

「大丈夫よ。きっと秋ちゃんが迎えに来てくれるわ。」

夏子おばちゃんを慰めてくれているのは、
どうやら隣の二瓶さんの奥さんらしい。

「そうね……。向こうには、秋子ねえさんがいるものね。」

お母さんが、春ばあちゃんを迎えに来る？
そんなの嫌だ。また私は、置いてきぼりにされてしまう。
悲しくて、寂しくて、体中が震えだす。

広間には、立派な祭壇が置かれている。
ひっそりと生きてきた春ばあちゃんには、似合わないような気がした。
むせ返るような線香の煙の向こうに、春ばあちゃんの遺影。
遺影の前に誰かが座っていた。見たことのある背中。

……まさか。

いや、間違いない。あれは、春ばあちゃんだ。
さっきの夏子おばちゃんの手が蘇る。
お母さんはまだ、春ばあちゃんを迎えに来ていないらしい。
このまま、幽霊でも良いから私のそばにいてほしい。
心から、そう思った。
もう、大切な人を失うのは、たくさんだ。
その顔を覗き込んだ時、はっと息を呑む。
こんなに悲しそうな春ばあちゃんを見るのは、初めてだ。
お母さんが亡くなった時だって、凜としていた人だった。
その春ばあちゃんが、今は悲しみで出来ているみたいだ。

死んでしまった事を悲しんでいるのだろうか。
それとも、私を残していく事を悲しんでいるの？
胸の奥がキューっと痛くなる。

なんとかしてあげたい。
このままじゃ、あまりに可愛そうだ。
天国には、悲しみは無いって聞いた事がある。
私は、どんなに寂しくても我慢するから、お母さん、お願い。

春ばあちゃんを早く迎えに来てあげて！

ゴォーっと音をたてて、雪混じりの風が吹く。
それと同時に、部屋の中に人影が現れた。お母さんがやって来た。
はっきりそうわかった。

私の願いは、お母さんに届いたらしい。
春ばあちゃんを迎えに来てくれたんだ。
ほっとした気分もつかの間、今度は強い孤独感に襲われる。
これでまた、私は置いていかれる。
お母さんが、春ばあちゃんの横に立っていた。
久し振りに見るお母さんの姿は、別れた日のままだ。
若くて、美しい。

「今まで小雪を育ててくれて、本当にありがとうございました。」

お母さんはそう言うと、春ばあちゃんに向かって深々と頭を下げた。
でも、春ばあちゃんお母さんに気がつかない。
お母さんは顔をあげると、今度は私の方に近づいてきた。

「小雪、迎えに来たよ……。」

迎えに来たって？
どういうこと？
まさか、死んだのは私ってことなの？

改めて、遺影を見つめた。
さっきまで、春ばあちゃんの写真だと思い込んでいた遺影は、
確かに私の写真だった。
私は死んだ。

いつ？

「あなたが病院に行こうとして、家の前の道路に飛び出した時、
運悪くトラックが通りかかったの。即死だった……。
春ばあちゃんは大丈夫。ちょっと働きすぎたのね。
少し休めば、元気になるわ。」

祭壇の前の春ばあちゃんをもう一度見た。
あの悲しそうな顔は、私のせいだった。
悲しませてごめんなさい。
だけど、春ばあちゃんが無事で良かった。
なんだか、ひどくほっとしていた。

「ごめんね。お母さんの力が足りなくて、
小雪を守ってあげられなかった。
その代わりに、小雪と春ばあちゃんの願い事を
一つだけ叶えさせてもらったわ。
会えたでしょ。子供の頃の春ばあちゃんに。」

.....えっ。。。
もしかしたら、さっきの夢。。。
あれは、夢じゃなかったの？

あのおかっぱ頭の女の子。
あの子は、本当に春ばあちゃんだったんだ。
可愛い女の子だった。

.....だとしたら。。。
昔から、春ばあちゃんが見たっていった雪ん子は

。。。たぶん私だ。
小さい頃から聞かされていた
あの雪ん子の正体が

私だったなんて.....。
何十年も前から、
私は春ばあちゃんの心の中に、ずっと存在していたんだね。
人の何倍も愛された気がした。
だって、生まれる前から愛されていたんだよ。

雪ん子の思い出として.....。

「運命を変える事はとても難しいの。
十年前、お父さんとお母さんが事故にあうのも運命だった。
せめて、小雪の運命だけは変えてあげたかったわ。
ごめんね、もう少し長く生きたかったよね。」

お母さんが泣いていた。優しさが、痛いほど伝わってくる。

「お母さん、泣かないで。だって、これからはずっと一緒でしょ。」

お母さんがこんなに近くにいる。
もう私は、誰にも置いていかれる事はない。
春ばあちゃんと離れるのは寂しいけれど、
私がお母さんにまた会えたように、
いつの日か再会できるはず。
でも、慌てなくていいよ。ゆっくり来てね。……春ばあちゃん。

春ばあちゃんはまだ、肩を落としたままうな垂れていた。
その姿を見ると切なくなる。
春ばあちゃんをこのままにはしておけないと思った。
あんなに悲しそうな春ばあちゃんを残してはいけない。
でも、どうしたら慰められるだろう。

そうだ！

両親を亡くして悲しんでいた私に、
春ばあちゃんがしてくれた事を思い出していた。

「お母さん、少しだけ待っていて。すぐに戻ってくるから。」



「待たせてごめんね。」

「もう、用事は済んだの？」

「うん。」

「じゃあ、そろそろ行こうか。」

小さい頃みたいに、お母さんと手を繋いだ。
ちょっと照れ臭かった。

「小雪！」

突然、後ろから呼ばれて、驚いて振り返る。
そこに、お父さんが立っていた。

「やっと、会えたな。」

お父さんは駆け寄ってきて、私をぎゅっと抱きしめる。
懐かしい、優しい匂い。

「ようやく、親子三人がそろったわ。」

お母さんの笑顔がそこにある。
降り続けている雪の向こうから、暖かな光が射してきた。

その光に包まれながら、私は、春ばあちゃんの事を想っていた。
そろそろ春ばあちゃんは、あれに気付いてくれた頃かな。
お母さんからもらったあのマグカップを、
春ばあちゃんのそばにそっと置いてきた。

中には、温めたミルクを注いで……。

私の『春ばあちゃんを想う気持ち』をたくさんたくさん受け取らせたよ。
こんな事しか出来ないけれど、早く元気になって欲しい。
私は、春ばあちゃんのお茶目な笑顔が、何よりも大好きなのだから。

いつのまにか、雪が止んでいた。
ずっと会いたかったお父さんとお母さん。
三人で、手を繋いでいる。
とても優しい気持ちだ。
そして私たちは、ゆっくりと光の中に吸い込まれていった。



大切な孫が、死んでしまった。
事故を起こしたトラックの運転手の話だと、
小雪は急に家の前の道路に飛び出してきたらしい。

私のせいだ。

あの子は優しい子だったから、
きっと私の事を心配して病院に来ようとしたに違いない。
私が殺してしまったようなもんだ。

「私も、そっちに行ったらいかんかね。
もう、生きていてもしかたない。」

新しい線香に火をつけようと、ふと顔を上げた。
見覚えのあるマグカップが目の前に置いてある。
これは、小雪のマグカップ。いつの間に……。
中には、温めたミルクが注がれていた。

あら？

マグカップの横、板張りの床の上に何かある。

何かしら……。

『春ばあちゃん ファイト！ 』

それは、雪で書かれたメッセージだった。
驚いて、窓の外を見つめる。
誰かが入ってきた形跡は無い。

……きっと小雪だ。死んだ後まで、私の心配なんぞして。
本当に、どこまであの子は優しいんでしょう。

雪は、いつの間にか降り止んでいた。
厚く重たい雲の切れ間から、一筋の光が差し込んでいる。

「あっ……。」

その光の中に一瞬、空に昇っていく小雪の姿を見たような気がした。

まさか……気のせいかな。

ため息をつきながら、小雪のマグカップを手にとった。
このマグカップを見ていると、
小雪が両親を亡くしたばかりの頃を思い出す。
五歳の子供が、あの寂しさによく耐えたもんだ。
私も頑張らねばいかんのかもしれん。
落ち込んでいる私を心配して、
小雪がこのマグカップを置いていったに違いないのだから。
あと、どれくらい残っているかわからん古びた人生だけど、
いずれ向こうで小雪に会った時、
恥ずかしくないように生きなきゃいかんね。

注がれたミルクを一口、口に含む。
何とも言えない穏やかな味がした。
それは確かに、小雪の優しさの味だった。
悲しみは、相変わらず胸を締め付けている。
でも、「ファイト！ 」だね……小雪。

雪のメッセージはすでに溶けきって、
後には小さな水溜りだけがポツリと残っていた。

おしまい